

聴竹居（旧藤井厚二自邸）

聴竹居は、家族ための住居として建築家の藤井厚二（1888～1938 年）によって設計され、近代的かつ西洋的、そして環境に優しいデザインを取り入れることによって、伝統的な日本家屋がどのように改善できるかを示す一例となっています。1928 年に完成し、木造モダニズムの傑作とみなされています。聴竹居は、日本の気候と生活習慣に最も適した家という理想を完成させることを目的とした一連の住宅改良プロジェクトの最後となる、藤井にとって 5 番目に造った家でした。自然環境を利用することで家族の住みやすさや快適性を向上させるという彼の革新的なアプローチは、日本の建築研究において現在も引き続き関心を集めています。聴竹居は 2017 年に国指定の重要文化財となっています。

聴竹居への訪問には、公式ウェブサイトからの予約が必要です。お盆（8 月中旬）と年末年始を除く毎週水曜と日曜に本屋と閑室のガイドツアーが開催されています。料金は大人 1,500 円、学生 1,000 円です。離れの茶室を含む特別見学は月 1 回土曜日に開催されており、料金は大人 2,500 円、学生 2,000 円です。3 日前までの予約が必要で、ツアーは日本語のみで行われます。

聴竹居と敷地

聴竹居「意味訳：竹の葉擦れの音が聴こえる住まい」は京都府大山崎町の天王山にあります。この詩的な名前は、かつて敷地を囲んでいた竹林にインスピレーションを得たものでしたが、藤井が芸術の場においても雅号として使用しました。藤井家の邸宅として使われていた当時の敷地は約 4 万平方メートルで、聴竹居より小住宅が 2 棟、お母様の家とガレージ、窯、大工仕事場、テニスコート、そしてプールなどがありました。聴竹居は、本屋と静かに熟考する部屋としての閑室、そして客人をもてなす茶室の 3 軒の建物から構成されていました。

本屋は、伝統的な日本建築とアールデコの影響を受けた西洋建築が創造的に融合されています。リビングルームにはフローリングと畳の部分があり、椅子に座っている人と同じ目線になるように畳のエリアは高さが工夫されています。アーチ型の仕切り壁で分けられた角の場所には、家族全員が一緒に座れるよう設計されたダイニングルームがあります。食事は、キャビネットのドアで隠された配膳カウンターを通じてキッチンから直接渡されます。

客室の椅子は、着物を着て快適に座れるよう藤井が特別にデザインしたものです。広い床の間には、部屋と床の間の両方を照らす 2 方向の照明器具が取り付けられています。読書室には、藤井と子供たちのための机や棚、そして戸棚があります。壁は伝統的な和紙で覆われています。特に大きな縁側は、柱をなくして眺望を良くするなど、デザイン上の工夫が多く見られます。窓の上下に採用したすりガラスが軒を隠し、庭の風景や向こうの景色の“額縁”の役割を果たしています。

藤井は環境工学の専門知識を住宅全体の設計や、特に夏の暑い時期の温度管理のために応用しました。太陽の熱から部屋を守るように軒の長さが計算され、換気のために屋根に設けられた通気口と低地の谷に通じる地下の導気筒が、外部の冷えた空気を直接居室空間へ運びます。この邸宅には、コンセント、ストーブ、スイス製の電気冷蔵庫など、当時利用可能な最新の技術や設備が装備されていました。

建築家藤井厚二

藤井厚二は広島県福山市の裕福な造り酒屋の次男として生まれました。彼は 1913 年に東京帝国大学（現東京大学）の建築学科を卒業し、現在は日本のゼネコン業界において最大手のひとつである竹中工務店に設計者として採用されました。藤井が主導したプロジェクトのひとつが、1916 年に建てられた旧朝日新聞大阪本社（現存しない）の設計でした。

1919 年に会社を辞めた後、藤井は西洋建築を学ぶために 9 ヶ月間ヨーロッパとアメリカを旅しました。翌年、京都帝国大学（現京都大学）建築学科の創設者から、建築図面に関する講義の依頼がありました。その頃、藤井は大山崎に広大な土地を取得し、住宅建築研究を進めるため実験住宅を建て始めました。

藤井は京都帝国大学での期間中に、工学博士の学位を取得し教授となりました。また、生け花や陶芸、そして茶の湯などの日本の伝統芸術についても学びました。49 歳に癌で亡くなり、自ら設計した墓は嵯峨野の二尊院にあります。